凡　例

1. 本書の各見出し項目は、1行目から、日本語表記（アルファベット表記が慣例となっている場合には、アルファベット表記）、よみ、英語表記、ジャンルの順に並んでいる。1行目の日本語表記がすべてカタカナの場合には、2行目のよみを省略した。1行目のアルファベット表記（例：RRG, IPA）のよみがそのアルファベットの文字としてのよみと同じである場合には、2行目のよみにも同じアルファベットの文字を記すか、よみを省略した。
2. 左肩に ˇ がついている用語は、見出し項目または見出し項目との関連で説明されている用語である。その用語が説明されているページは「目次索引」に太字で表示した。
3. 本書で使用したその他の記号・略語は、概略、以下の通りである。本文中で解説されているものについては省略した。
4. 文献は、原則として、手に入りやすい（特に日本語で書かれた）ものを優先した。

[　]……音声表記
/ / ……音素（表記）
- ……接辞境界（接中辞以外）
= ……接語境界
<　> ……接中辞
*（左肩）……［1］再建形　［2］非文法的な形、表現
?, ??……容認性の低い表現
~ ……重複形内の境界
∅ ……ゼロ要素
（→A）……別項目Aへの参照指示
cf. ……参照
⇔……反対
A’ ……Aにアクセント核がある（日本語）
A＞B ……［1］AからBへの変化　［2］階層の上＞下　［3］動作主的項＞被動者的項
A→B／C_D ……CとDに挟まれた環境でAがBに変化する
1 ……first person　一人称
2 ……second person　二人称
3 ……third person　三人称
ABS ……absolutive　絶対格

英日対照表

【A】

abbreviation　略語
ablative　奪格
ablaut　アブラウト、母音交替
absolutive　絶対格
accent　アクセント
Accessibility Hierarchy　接近可能性の階層
accusative　対格
acoustic phonetics　音響音声学
acrolect　上層方言
acronym　頭字語
active voice　能動態
active-stative　活格・不活格型
ad hoc concept construction　アドホック概念構築
adjective　形容詞
adjunct　付加詞
adposition　側置詞
adstratum　傍層
advanced tongue root　ATR
adverb　副詞
affectedness　受影性
affirmative sentence　肯定文
affix　接辞
affixation　接辞化
affordance　アフォーダンス
agent　動作主
agglutinating language　膠着語
agglutination　[1] 膠着　[2] 語の癒着
agglutinative　膠着型
agrammatism　失文法
agraphia　失書
agreement　一致
airstream mechanism　気流機構
Aktionsart（独）　アクチオンスアルト
alexia　失読
alienable possesion　譲渡可能所有
alignment　アラインメント
allegory　諷喩
allograph　異文字
allophone　異音
alphabet　アルファベット
ambiguity　曖昧性
ambitransitive　自他同形動詞
American Structural Linguistics　アメリカ構造主義言語学
analogy　類推
analytic (language)　分析的（言語）
anaphor　[1] 照応形　[2] 照応詞
anaphora　（前方）照応
anaptyxis　語中音添加
animacy　有生性
animate　有生
antecedent　先行詞
anthropological linguistics　人類言語学
anticausative　逆使役
antipassive voice　逆受動態
aphasia　失語症
apheresis　語頭音消失
apocope　語末音消失
applicative voice　適用態
arbitrariness　恣意性
archiphoneme　原音素
areal norm(s)　地域基準
argument　項
argument alternation　項交替
argument structure　項構造
article　冠詞
articulation　[1] 調音　[2] 分節
articulatory phonetics　調音音声学
aspect　アスペクト、相
aspiration　気音
assimilation　同化
association function　関連付け機能（→枠付け類型論）

子　音

(1) 調音位置による子音の類

下側の器官（動的）		上側の器官（静的）	調音位置による子音の類		
下唇	→	上唇	1	両唇音	bilabial
	→	上歯	2	唇歯音	labiodental
舌尖/舌端	→	上歯の裏	3	歯音	dental
舌端	→	歯茎	4	歯茎音	alveolar
舌尖	→	歯茎後部	5	そり舌音	retroflex
舌端	→	歯茎後部	6	後部歯茎音	postalveolar
前舌	→	硬口蓋	7	硬口蓋音	palatal
後舌	→	軟口蓋	8	軟口蓋音	velar
	→	口蓋垂/軟口蓋の縁	9	口蓋垂音	uvular
舌根	→	咽頭壁	10	咽頭音	pharyngeal
声帯	→←	声帯	11	声門音	glottal

IPA（国際音声記号）のチャート

肺気流による子音の表ではこれら1から11が左から右に並べられている（これらは器官の図の唇から喉頭までに対応）。
肺以外の気流によるものは小さな表の上下に簡略に示されている。

記号が表には含められていない子音		記載場所
調音位置が「歯茎硬口蓋」の子音	[ɕ] [ʑ]	「その他の記号」
調音位置が「喉頭蓋」の子音	[ʜ] [ʢ] [ʡ]	「その他の記号」
調音位置が「舌唇」の子音	[t̪] [d̪]	「補助記号」

調音の違いが表には含められていない子音		記載場所
調音位置が「歯」の子音の明示	[t̪] [d̪]	「補助記号」
下の調音器官が「舌尖」か「舌端」かの明示		
舌尖を使う	[t̪] [d̪]	「補助記号」
舌端を使う	[t̪] [d̪]	「補助記号」

〔斎藤純男〕

語順
ごじゅん
word order

文法

文は複数の句からなることが普通であるが、この句の先後関係のことを語順と呼ぶ。

【語順と文法】語順には文法関係を示すはたらきがある。たとえば、格に関する屈折をほぼ持たない英語においては、基本的に動詞の前に出現するものが主語であり、後ろに出現するものが目的語である。John hit Mikeという場合とMike hit Johnという場合では誰が誰を殴ったかという関係が異なる。

また、語順は語用論的な表現効果をもたらす場合がある。たとえば、I won't eat that pizzaという文は、目的語を文頭に持ってきてThat pizza, I won't eatと発音しても基本的な意味に変わりはないが、(主語ではなく) 目的語が主題になっている。

【基本語順】基本語順 (basic word order) とは、ある言語における主語 (S)、目的語 (O)、動詞 (V) の無標の語順を言う。たとえば、英語ならJohn hit MikeのようにSVOの語順をとるが、日本語は「梅田くんが青山くんを殴った」のようにSOVである。

ある言語の基本語順を決める際には条件がいくつかある。(A)平叙文の主節であること。疑問文や従属節で語順が変わってしまう言語は多い。(B) 主語も目的語も語彙的名詞句である他動詞文であること。主語や目的語が代名詞であると語順が変わってしまう言語もある (フランス語など)。(C) 語用論的に無標な文であること。SVO言語である英語でも上記のように目的語を主題化した際にはOSVの語順となる。これは基本語順ではない。

【語順類型論】人間言語の基本語順にはSOV、SVO、OSV、OVS、VSO、VOSの6語順が可能性としてある。しかし、実際には、日本語のようなSOV言語が言語数としては最も多く、英語のようなSVO言語がそれに続き、両者で80%以上を占めている。 [長屋尚典]

語族
ごぞく
language family

歴史

複数の言語間に単一の祖先を共有する関係がある場合、それらの言語の間には系統関係 (genetic relationship) があると言う。語族とは、系統関係によって束ねられた諸言語の集合を言う。語族の例としては、インド・ヨーロッパ語族 (Indo-European family; 印欧語族とも。英語、ドイツ語などのゲルマン諸語、フランス語、スペイン語などのロマンス諸語、ヒンディー語、ペルシア語などのインド・イラン諸語などを含む語族) やオーストロネシア語族 (Austronesian family; 台湾諸語、フィリピン諸語、ポリネシア諸語などを含む語族) がある。また、ある語族に所属する言語群が下位グループをなす場合には、語派 (branch) と呼ばれる。たとえば、ゲルマン諸語は、インド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派を構成する。語族という用語は、上記2つの語族のように、系統関係が明確で、祖語が再建されている場合が基本であるものの、シナ・チベット語族 (Sino-Tibetan family) のように、系統関係は多くの学者が認めていても祖語の再建が未だ成功していない場合や、アルタイ語族 (Altaic family) のように、系統関係に疑問が提出されている場合にも使用されることがある。したがって、人類言語の全語族数は学者によって必ずしも一致しないが、30ほどの語族が設定されている。また、既存の語族間に、さらに系統関係を認めようとする場合、複数の語族を束ねる大語族 (phylum) という用語を使用する学者もいる。なお、日本語やアイヌ語のように、他の言語との間に系統関係が認められていない言語を孤立的言語 (isolate, isolated language) と言うが、このような場合にも1つの言語のみを含む語族を立てる。

[文献] M. Ruhlen. *A Guide to the World's Languages. Vol.1. Classification*. Stanford Univ. Press, 1987.

[田口善久]

使役構文

しえきこうぶん

causative construction

文法

言語学で言う「使役」は、対応する英語表現causation（causeは「原因（となる）」を意味する）と同じく、因果関係を意味の中核とする用語であり、日本語の文法における「使役」よりも適用範囲が広いので注意が必要である。「使役構文」は因果関係を意味に含む述語（→ 述語・項）を持つ構文を指す。

【複合的な事象としての使役】因果関係は2つの事象間の関係として捉えられるのが普通であることに対応して、使役構文が表すのは原因事象（causing event）と結果事象（caused event）からなる複合的な事象（complex event）であると考えられている。そのような因果関係を意味に含む述語を持つのが使役構文であるとすると、日本語の「動詞＋サセ」を述語とする「花子が太郎に窓を開けさせた」のような（＜花子による太郎へのはたらきかけ＞という原因と＜太郎が窓を開ける＞という結果からなる事象を表す）文のみならず、「太郎が窓を開けた」も使役構文であることになる。後者も、＜太郎による窓へのはたらきかけ＞が原因となって＜窓が開く＞という変化が生じたことを表すのが典型的であり、述語動詞の「開ける」が主語の指示対象による目的語の指示対象へのはたらきかけとその結果としての目的語の指示対象の変化を意味に含むからである。

【語彙的使役構文と分析的使役構文】「太郎が窓を開けた」と「花子が太郎に窓を開けさせた」が例示する構文はそれぞれ語彙的（lexical）使役構文と分析的（analytic）使役構文と呼ばれている。両者の違いは、原因事象と結果事象が単一の語彙項目（例：他動詞「開ける」）の意味に組み込まれているか、2つの語彙項目（日本語の場合には動詞と使役接辞サセ）の組み合せによって表現されるかにある。（英語の分析的使役構文Mary made John open the windowでは使役動詞makeが日本語のサセに対応する役割を担っている。）語彙的使役構文（例：Mary killed John）は分析的使役構文（例：Mary caused John to die）よりも緊密な因果関係―原因事象と結果事象が分ち難く結びついているという捉え方―を表す場合に用いられる傾向がある。これは類像性の例であると言える。

【許容使役】使役構文は、主語の指示対象Xの行為が原因事象Yである―Xがいるからこそ結果事象Zが生じる―場合のみならず、Zの発生を十分阻止できる立場にあるXがその力を行使しない―Xがいるにもかかわらず Zが生じる―場合を表すのに用いられることもある。後者の場合を許容（permissive）使役と呼ぶ。許容使役を表す文においては、XがZを阻止する力を行使しないことがYを構成する行為として捉えられていると考えられる。英語では使役動詞letを含む分析的使役構文を用いて許容使役を明示的に表すことができる（例：Don't let appearances fool you）。

【使役と受動】言語によっては、使役と受動（→ ヴォイス）を同じ構文を用いて表すことがある。たとえば英語のI had a book stolenは「本を盗ませた」（使役）と「本を盗まれた」（受動）のいずれの意味にも解釈できる。このような曖昧性が生じるのは、方向性こそ異なるものの、使役構文と受動構文には主語の指示対象とある事象（上の例の場合は本が盗まれること）との間に成立する影響関係を表すという共通点があるからであろう。

一方、日本語の使役文「花子は息子を交通事故で死なせた」は、受動文「花子は息子に交通事故で死なれた」と客観的には同じ事態を記述している場合でも、後者とは異なる許容使役の意味を担う―息子の死に対する花子の責任に焦点を合わせた捉え方を表す―と考えられる。

［文献］斉木美知世・鷲尾龍一『日本文法の系譜学』（開拓社 2012）、西村義樹・野矢茂樹『言語学の教室』（中央公論新社 2013）

［西村義樹］

目次索引

＊太字の用語は見出し項目を、太字の数字はその用語の説明があるページを示す。

ABA分布→周辺分布・周圏論的分布・ABA分布
AM理論……169
ATR……**205**, **206**
c 統御……**139**
DOM（示差的目的語標示）……**157**
F0曲線……169
H変種→高位変種
IPA（国際音声記号）……**002**, 014, 022, 130, 140, 154, 162, 174, 205
L変種→低位変種
Primary strategy……**132**
RRG……**001**, 135
SAE……**075**
SPE理論……016, **129**, 141, 180
ToBI……014, **169**
VOT……**040**
wh-cleft→擬似分裂文
wh句の移動……036, **150**

【あ】

アイデンティティ……**001**, 103, 126, 134
曖昧性……**002**, 239
曖昧性除去……**039**
アクセント……**003**, 014, 216
アクセント核……**003**
アクチオンスアルト……**004**
アコモデーション……**207**
アスペクト（相）……001, **004**, 017, 054, 078, 083, 095, 117, 118, 136, 166, 167, 196, 200, 211, 227, 238
アドホック概念構築……**039**
アフォーダンス……**006**, 176
アプラウト……**007**
アメリカ構造主義（言語学）……**086**, 210
アラインメント……**007**, 074, 177, 191
アラビア数字……**125**
アルファベット……**008**, 125, 190

【い】

イーミック→エティック・イーミック
異音……**027**, 028, 076, 220
異化→同化・異化
意外性……**118**
意義……**173**
息もれ声→発声
異形態……**057**
倚辞→接辞
意志性……**009**
威信……**009**, 034, 043, 068, 092, 191
依存文法……**010**
位置異音……**027**
一次分裂……202
位置変異……**027**
一致……007, **010**, 033, 054, 062, 081, 108, 113, 117, 124, 157, 166, 175, 200, 215, 227
移動→wh句の移動、名詞句の移動
移動体……012
移入……**109**
意符→義符→声符・義符
異分析……**099**
意味の悪化……**011**
意味の拡張……**011**
意味の向上……**011**
意味の合成……**013**
意味の縮小……**011**
意味変化……**011**, 112, 147, 218, 236
意味変化論……**218**
意味役割……**012**, 014, 017, 033, 081, 082, 113, 139, 191, 200, 213
意味論……001, 002, **013**, 046, 056, 086, 095, 105, 119, 160, 189, 194, 203, 220, 222, 223